

## 日本篆刻家の研究

― 山田正平の実父木村竹香について ―

神野 雄 二

### 一 はじめに

日本における印学の研究、印章や篆刻そして印人や印譜の、広い視野に立つ体系的な研究はまだ十分なされていない。本研究は、日本の印章や篆刻の歴史的、文化的な解明を目的としており、総括的には日本の印学の体系化を目指している。これは書学・書道史の対象としてだけでなく、美学・美術史、歴史考古学、文化史等その裨益するところは甚だ大きいと思われる。

これまで、日本や中国における印章や篆刻家に興味を持ち、それへの史的考察や作品研究をテーマに据え論考を発表した。日本の篆刻家の研究、主として日本の印聖高芙蓉研究、並びに山田寒山、山田正平等の事跡の調査・研究と作品分析<sup>(1)</sup>、そして印学の継承とその発展を探ることを問題としてきた。また、わが国の印人伝における嚆矢言える中井敬所の『日本印人伝』<sup>(2)</sup>をさまざまな文献・資料より拾遺し補訂することを課題としている。篆刻の専家はもちろん、篆刻に関わる傍系の文人・芸術家の研究を併せて進めている。

山田正平（明治三十二―昭和三十七年（一八九九―一九六二）は、昭和を代表する篆刻家で、豊かな詩情を持ち、書、画、篆刻三絶を善くした。感興を重んじ、俳精神豊かな洒脱な作風で知られる。明治三十二年二月一日、新潟県新潟市古町に、篆刻家木村竹香の次男として生まれた。幼少（十五歳）から父のもとで篆刻に志している。一九一四年、十六歳の初夏、東京に出ており、竹香とは十五年間生活したことになる。正平が篆刻に志したのが十五歳の頃であり、当時すでに篆刻技法の基礎を学び終えていたことを考え合わせるならば、竹香との関係を探ることは意義あることと思う。

本稿では、正平の実父木村竹香に関して実証的総合的に言及する（図1）。過去に本テーマで執筆したが、新知見を加え、改めて考察するものである<sup>(3)</sup>。

### 二 木村竹香について

#### 1、生涯

木村竹香に関して以前紹介したが、本稿では新しい知見を新資料とともに紹介する。木村竹香の生涯を通覧するに、基本となる資料は次の四種である。一は竹香の戸籍謄本である。二は横野春松が月刊誌『北溟』（昭和十一年十月十日）に「人物春秋（十二）、名人木村竹香老人」として述べた一文である。三は新潟大学助教授岡村鉄琴氏の論考である<sup>(4)</sup>。四は高原哲氏が『はくぼく』に掲載された『篆刻家木村竹香小伝』である。本稿はこれら諸氏の論考に負うところが多い。

竹香の業績は、篆刻の制作と、邦人印譜として屈指の名譜である『羅漢印譜』の刊行に代表されるが、その仕事は実に緻密で繊細である。

山田家に印譜や写本、また彼の生涯を知る上で格好の資料が遺されている。ここに新史料を二種提示したい<sup>(5)</sup>（図2）。その一は『写意式』で「醉古堂印」の押印のある写本である。醉古堂は竹香の齋号である。これは三〇丁からなり、縦二四・五cm、横一七・二cmである。内容は印章や篆刻作品の模写で、他に古瓦硯の拓本、大江平次郎の御用標章などを貼り込んでいる。その二は『舞花積雪一』で「醉古堂印」の押印のある写本である。三六丁からなり、縦二四・五cm、横一七・〇cmである。内容は当代篆刻家の篆刻作品の印影、他に岡本椿所の転居通知葉書、泉布の拓本などを貼り込んでいる。

筆者が以前に竹香について函館在住であられた、正平の兄軍平の妻木村キクイ氏に書簡でお尋ねした折の返書から、竹香が昭和十八年に没した際、篆刻に関係するものは山田家に贈られたということが判明した。そこで、羅漢印もその折に木村家から贈られたものと推測できる。

木村竹香は慶応三年（一八六七年）三月十日、新潟白根に生まれた。名は政年、齋号を羅漢窟という。明治二十三年十二月五日、中蒲原群白根町大字白根の田村半平の二男として入籍している。妻は木村マス、二人の間に三男三女が生まれている。長男軍平、次男正平、三男幸平、長女キミ、次女テイ、三女フ

ミである。

竹香は若年呉服の行商をしていたが、勉学の時間がとれず、東京に出てみた  
いと考えていた。名人堅気の性質であり、商売には不向きであった。ただ手先  
は極めて器用であり、これを生かした仕事をしたいと望んでいた。これを知つ  
た竹香の甥にあたる田村二十一は、竹香の父親の反対をおしきって礼物を整え、  
当時の越後印刻会の名工大江萬里の門を叩かせた。萬里は、中年者はものにな  
らないという理由で入門を断った。本来なら悄然として家に帰るところであろ  
うが、竹香は直接上京し、帝室技芸員である中井敬所（一八三一〜一九〇九、  
名は兼之、字は資同）の門を叩いた。敬所のもとで一年半の間勉学に励み、香  
草の香の一字を許され、竹香と号すことになる。この後、以前入門をことわら  
れた、古町三番町に住んでいた大江萬里の真向いに門戸を張った。相当の一徹  
者であったことを物語つていよう。

また、敬所に自刻の印を送りその叱正を乞うたが、十年の間一日もかかすこ  
とがなかったという。壮年は岡本椿所（一八七〇〜一九一九、本名山名氏・名  
は義邦、叔禮・椿所と号す、岡山津山の人、中井敬所の門に学び徽派の印をよ  
くすを師とし、終生その師弟の情誼も立派であった。竹香の篆刻は緻密で繊細  
な刻風である（図3）。

竹香の人間性を知る上で興味ある逸話を二、三紹介してみる。

ある日のこと竹香の物事に対する潔癖さが司直の知る所となり、犯罪の有無  
を決める印章判定の嘱託を受けた。解明できると五円が、できない場合は三円  
が支払れることになっていた。竹香は後者の場合が多かった。これは竹香の慎  
重さの現れといえよう。

更に竹香は骨董を愛翫することを常としたが、ある日それらのすべてが差し  
押えられた。これは以前某人に泣きつかれ、額面のみず印を捺したことが原因  
であった。この中に有名な山田寒山の刻した十六羅漢の入った紫檀の龕があっ  
た。不思議なことにこれは厄を免れて、現在は寒山寺山田家蔵となっている。

晩年は長男の軍平、二男の幸平が勤める日魯漁業の關係で函館に移り住んだ。  
その折の引越しの挨拶状は次に掲げる文面である。

拝啓 尊家益々御多様に被渡奉慶賀候 降而老生儀年来の持病難患も

島田医院長の懇切なる御診療に依り次第快方に御座候へども未だ全快に

至らず候処 此程子息等（母妙英尼）の三十三回忌法要を営辨の為め孫  
兒ともく来会そのこと修了

これを機会に病軀を我等兄弟に任せ函館に静養をと切望致志候 郷土  
の尊く辱けなさ各位の深甚なる御芳情茲にまた十年愛護訓育を賜り分外  
至極只管感銘拝謝に堪へず候 情去り難く御座候も子息等の意に任せ  
急々身辺の玩具雜器を片着け次第更に兒等の迎を待ち渡函杉並町一八三、  
或は松蔭町一七四の両方へ随意住居致すことに決定仕候

一々参庭拜芝の上御礼申述べべきの処身体不自由にて甚失礼ながら書  
中御挨拶迄我儘勝手何卒御寛恕願上候

頓首

竹香事

木邨 政平

しかし、長年住みなれた故郷が忘れられず帰郷し、回向院の副住職となった。  
昭和十一年の春には古稀を迎え、自らの葬式を兼ねて寿筵を開いている。昭和  
十六年夏頃まで回向院の羅漢窟に住んでいた。その後再び函館に渡り、昭和  
十八年一月二十八日亡くなった。享年七十七歳。同年二月十五日会津八一は竹  
香の死を悼み『般若心経』を書き靈前に捧げた。

竹香の墓地は、新潟市西堀通六番町・祐櫛山浄泉寺境内にある。浄泉寺は浄  
土真宗大谷派である。墓銘は「俱會一處」と正面に刻まれており、台座部に  
「竹香居」「木邨」とある。また右側面には「大正二年七月十二日」、左側面に  
「釋妙英 釋竹香木村政復修」とある。墓銘は、山田寒山の筆になる。

ここに葬儀通知を掲げる。これは北海道新聞の昭和十八年一月二十九日、  
三十、三十一日付けにて掲載された。

父竹香議豫而病氣／療養中の處養生不相叶七十／七歳の高齡を以て一  
月廿八／日午前八時永眠致候間生前／の御厚誼を拝謝し此段御通／知に  
代へ謹告仕候／追而葬儀は三十日午後零／時三十分自宅に於て告別／式  
執行可仕候尚乍勝手通／夜の儀は御辞退申上候

一月廿九日 杉並町一八三

男 木村軍平

幸平

東京 山田正平

友人総代 山田繁造

外親戚友人 一同

御會葬御禮

一月廿日 杉並町一三八

木村軍平

木村竹香の文章は多く遺されていない。むしろ殆んど存しないといえる。そういう意味で次に掲げる二件は重要といえよう。これは元新潟新聞紙上に掲載されたものであり、其の後、鏡淵九六郎（一八六九—一九四〇）が『新潟古老雑話』として昭和八年六月に出版した。それが更に平成三年五月、新潟明治大正文化研究会代表の蒲原宏先生監修のもと新潟県民俗学会から覆刻出版された。この新潟新聞の同記事の切り抜きが山田家に遺されている。それによると「青山碧山翁」は「続古老雑話（二五）」に「羅漢印と三大家の合作」は元は見出しが「三大家の合作」であり「続古老雑話（二六）」に掲載された事がわかる。また新聞記事とはいくらか文字の異同がある。竹香六十六歳の時の文章である。

さて、木村竹香の文章は次の二件である。これから『羅漢印譜』制作の動向が伺え興味深い。そして如何に竹香がこの事業に執着したかが見て取れよう。

(1) 青山碧山翁 日和山畔回向院 木村竹香翁 六十六歳

私の長男は函館で実業に従ひ二男は東京下谷の山田寒山師を襲名して篆刻に従事してゐるが私は新潟が気分にはピッタリするので、孤独生活を覚悟して再住することにした。新潟の美術家としては青山碧山を挙げたい。此人は若松生れだが父に従ふて、若年から新潟東堀七番町に移居し、早くから明清漆器の制を究め、箔絵沈金等の唐物細工を好み、漆に作つた種々結構のものを遺され、又白漆を工夫し碧紫等を案出された。読書の趣味も高尚で手に古本を放たず、新聞は遠ざけて読まなかつた。苦心の

作も俗眼に入らず其業少しも振るはなかつたのを憫れんだ楠本県令が、翁に勧めて東京に移させたが、碧山と号したのは青山御所の唐机を修繕されてからだと聞く。嘗て聖武天皇御遺愛の古琴を模する勅許を受けた時、漆の部分は翁が擔任された。第二回内国勸業博覧会に、四曲小屏を出品し、其精巧と高価とに紳士を驚かしたといふが、それは今宮内省に納まつてゐる。翁は新潟で獲た乾漆の観音像を愛蔵し、非常の高金で乞ふものもあるも決して手離さなかつた。当時翁の座してゐる畳は摩り切れ、紙に糊して覆ひ置くほど窮迫してゐたから友人の高森碎巖、西田春耕、鈴木順

丈の諸氏が之を以て衣食に換よと勧めたが、貧は我家の常である。今此像に別れては何を樂しみに生きやうと翁は頻りに惜むので、遂に勧告をやめたといふ。私が十数年間心がけてゐた十六羅漢の印龕を作つて貰はうと東京下谷に翁の宅を訪ふた処、翁は観音像に向つて永々と礼拝してをられたが晩景であるから大いに困つた。見れば像は五寸ばかりで小さき千体仏が幾十となく周囲に置かれてゐる。やがて翁は座右にあつた盃を取り御茶代りとしてさ、れたが、帰る時に青貝入りの小さき香合を贈つてくれた。謹んで拝見せうとすると、マアく帰宅の上ゆつくり御覽下さいといはれた。爾来上京毎に訪問したが翁の逸話は頗る多い。その中に新潟からの門生が赴いた時、邸前の小さき空地の一隅に柿の葉其他枯葉の堆かひのを見つけて綺麗に棄て、しまつた処、家内が見つけてそれは毎日こゝで座禅をされる所であると注意され恐縮してゐると、翁が聞きつけお前はあまり出過ぎたことをする、人の命ぜぬことをするものぢやないと叱られたことがあつたといふ。

(註) 岩船の富豪国井氏が観音像のために、同邸に小堂を建て安置せんことをはかつたが、金に換るのでないからとて翁も喜んで其意に応じ、大正の初年入仏式を執行し三日間附近へ写経を頒与された。

(2) 羅漢印と三大家の合作

青山碧山の事は先般も話したが更に附加すべき佳話がある。

碧山は新潟から出世して日本の名匠となつた程だから従つて変人でもあつた、明治廿四年春、私は畢世の望みとして十六個の羅漢印を思ひ立ち、



まづ島田亮齋に乞ふた、その形大なるは五寸、小なるは二寸、いづれも羅漢各自の風貌躍如として出来たが、其間春と盆とに催促して十二年を要した。斯くて漸く出来上がった時、故山田寒山氏が来港中なのでその篆刻を引受けてくれたが出来上つた頃小田原の天海禪師が当市瑞光寺で羅漢供養をした際奇縁にも私の羅漢印の開眼式を施行してくれた。それから印龕の木地を新潟で製作したが高さ二尺幅一尺三寸であつた。こゝまで来ると私はこれからの事は碧山氏に相談する外なしと考へ上京して懇囑した。扉は天海禪師撰の瓦礫放光の四字と、伊藤博文公の題せる金石結縁の四字を、中村蘭臺が篆書したのを碧山が凸字に彫り、裏は金紫銅の経筒に天然の如意、又一方に蓮と花卉で白漆を用ひ上蓋には蝙蝠と桃、即ち福寿の意を現はし二年ほどかゝつたが、鄭重の荷造りで届けてくれた。この時恰も濱村蔵六を富山天池が同伴して来たので、御馳走に荷ほどきした処、この彫この塗、天下の珍なりと激賞し蔵六先生も、初めて碧山の非凡を知り帰京したら何か注文したいといふのに乗じて、私は同氏にも其裏の経筒に禅語の一句を依囑した処、早速快諾されたので茲に碧山の作に蘭臺の篆書と、蔵六の篆刻がそろひ三大家の合作となり、今でも之を家宝としてゐる。

(註) この竹香氏に贈つた碧山翁の書簡によつても名人の面影がしのばれ、書も文意も高士の面目が見える、全文を紹介したいが長くなるから省略する、翁は関東大震災の翌年病歿、享年七十八(或は九?)

## 2、竹香に関わる事跡

筆者は昭和五十六年夏、山田寒山・正平父子の調査を計画し新潟を訪れた。その折交友のあつた数人の方から木村竹香に纏わる逸話を伺うことができた。一人は笹川勇吉氏である。笹川氏は新潟市西堀通り四番町で笹川もち店を営んでいる。氏は石州流怡溪派(茶道)の師承小池上翠春の弟子であつた。竹香は笹川氏の弟弟子にあたる。昭和十五年十一月十日、皇紀二千六百年を祝して草竹庵鍋茶屋において「奉賛茶道大会」を催した。その時企画にあつたのが笹川氏と竹香であつた。竹香は仁義に厚く、清廉さと純粹さを貫いた人であつたという。

続いて、新潟市西堀通りで骨董商を営む今井幸平氏にお会いできた。今井氏

の父尚平は竹香と親交を結んでおり、竹香晩年には尚平の妻が何かと竹香の身の回りの世話にあつたという。これを感謝して、竹香が亡くなった後、軍平と正平がお札に訪れている。

竹香は新潟の財閥の印を刻すことが多く、人格者であつたらしい。晩年回向院の副住職をしていたが耳を病み、二階にいては来客の声が聞こえない。そこで一階の門戸に「在・不在」の札をかけ、鐘をつるし、来客がそれを鳴らすと降りてきて応対した。

ある日のこと孝平氏が羅漢窟を訪ねた所、竹香は満面に笑みを浮かべている。孝平氏が「何をどのように喜んでおられるのか」と問いただした所、竹香答えて言うに「正平が徳富蘇峰の印を刻し、私の所へ蘇峰の書軸と書翰を送り届けてきた」と。ここに述べた印は「日本男児(白文)」と「蘇峰(朱文)」と思われる。両印とも『増補版山田正平作品集』(木耳社、昭和五十九年七月)に収められている。

更にもう一人は、新潟市鹿瀬町にある宝来寺住職今川文暁師である。今川師は山田寒山に篆刻を学んだ津川正法寺住職乙川大愚の法弟にあたる。魚心子と号し、篆刻・刻字に巧みで、洒脱な書面をよくする。今川師は「印人」正平、大愚、画人、靈山の想い出(上)、『いしぶみ』第三号、新潟拓本研究會、昭和五十年五月)で竹香・正平に触れている。

話は昔に溯るが大正八、九年頃、新潟の古町通り四番町の西側、木村竹香印房の硝子戸の店に、父竹香と机を並べて仕事をしていた紺緋の着物をきた正平をよく見かけたが明治生れの人は或いは記憶にあるかもしれない。(中略)この寒山と親交のあつたのが、正平の父木村竹香で、其後古町四番町の家をたたんで宗現寺の別院日和山の回向院に当時本師の命によつて独居していた私の二階へ、山文の世話で移り来たり、暫くの間自由な趣味的な生活を楽しんで来た。二階には独居老人、下は独居若人の私、□と老若が或る年の暮、近くの昭楽軒の二階で忘年会をやつた事がある。老人中々元気で坐布とんを腹の下に下げてドスコイ、ドスコイと相撲甚句の独演をやつて若い私を驚かせた。角顔の白髪白髯の老人であつた。

正平も二回ほど父を訪ねて泊つたが、喜美子夫人手製の帙仕立の物容

れをみやげに頂いたことがある。其後竹香老人は寄る年波の自炊も憶劫になつてか、北海道から長男が迎えにきて行つたが、其後歿くなつたとあとで山文から聞いた。思えばこの竹香と寒山の邂逅によつて正平、大愚の巨歩的な印人が新潟に出現したのであつた。

竹香が回向院にいた頃の事柄が簡にして要を得た文章で綴られている。竹香の平生の生活の一端が窺える。今川師が文中ふれた乙川大愚は、印人としてそれほど著名でないかもしれないが、彼の印譜『篆刻般若心経』を見るに、相当の刻技を持っていたことがわかる。山田寒山の刻風を徹底して学び咀嚼し、氣韻の高い作風をたてている。山田寒山の系譜の一人として加えたい篆刻家である。今川氏が大愚について述べる。

「乙川大愚」は新潟宗現寺乙川文獅の弟子で私の法兄である。寒山が師匠の好意で宗現寺滞錫中、正平と共に篆刻を学んだものである。正平はその後寒山の養子となつて喜美子夫人と東京寒山寺に住居を構えていたが、大愚は永平寺に修業に行き其後上京駒沢大学の聴講生になり、縁あつて津川の正法寺に住し、寺務の余暇に篆刻や、文人画、篆額などを趣味として刻つていた。正平はその道で身を立てたが大愚は趣味として打込んでいた。だが趣味や道楽の域に止らず立派な作家であつた。作品としては『篆刻般若心経』『三同契』の印譜があり、『観音経印譜』は石には刻らなかつたが、朱筆の配篆は未完のまま和冊に綴つられて遺されている。四六時中酒盃を離さず、同室で寝るとかん声雷の如く眠れるものではなかつた。鯨飲六十歳、技いよいよ枯淡に入らんとする時、惜しい生涯を閉じたが、交友としては磯野靈山、竹工家飯塚琅玕、板画の棟方志功などみな大愚の印を愛用、作品に光輝を放たしめたものである。その縁で私もこの三人を知り、その風格にもふれ得たことはいい思い出になっている。

更に今川氏は、正平・大愚の才を重んじ後世へ伝えたいと念願する。

この卓絶せる二人の篆刻の妙手は共に新潟の生れであり、その作品印影等は後世に遺さなければならぬし、斯道後進の好みに資したいもの

と思う。印譜の作製・篆額の拓本、それに代表的な画も加えて一巻の帙とする。その以前に二人の諸作品を蒐集して一般人に展覧江湖に味得の機会を得させしめたらと、念願してやまないものである。

木村竹香の逸話から乙川大愚へと話題がすすんだが、山田寒山を継ぐ篆刻家が山田正平以外にも存在したことは特記してよいだろう。

### 3、木村竹香と山田寒山

山田正平は「会津先生と私」(『書品』第七九号・東洋書道協会、昭和三十二年四月)において、実父木村竹香と岳父山田寒山について述べている。

この辺で私が山田姓になるについての由来の話に入りたいが、その前に、師でもあり岳父でもある寒山翁と実父竹香との関係を少しく述べねばならぬ。寒山師の新潟への初遊は明治三十六年で私は幼少で殆ど記憶とてない。その折実父竹香の依頼で羅漢鈕の大陶印十九顆を篆刻し、それが中井敬所はじめ当時の印壇で寒山一生の傑作と賞讃され、更に竹香老人の発願でこの印を主体とし当時の名流、詩人、書画家、印人八十余家の題跋を附し、金石結縁、瓦礫放光、上下二冊の墨集を成さんの企てをなし、竹香献身十年の努力が結晶して新潟でその羅漢印譜が刊行出来たのである。このため寒山が竹香に与へた手簡三百二十余通。印譜集録の名家は、伊藤、西園寺、槐南、寧斎、敬所、香遠、荃廬、鳴鶴、一六、黙鳳と云つた人々を網羅し、寒山翁なればこそ、また竹香老人を得ればこそその感を深くする。(中略)竹香老人は来游の五世蔵六、初代蘭台の至芸をきわめて尊重し斡旋も至らざるなしで、交遊もここまでいたればの嘆も覚えず出る位であるが、寒山翁に対してはまた格別でほとんど心を傾むけた感じである。

私の物心ついた頃は蘭台やうやく病篤く、蔵六すでに世を去り、寒山独り活躍の最中で、何かにつけ来信もあり、坐客との話題にも日として出ないこともない位で、私の十五から始めた、たどたどしい篆刻もいつしか寒山和尚の目に入り是非出京しろと矢の催促となつた。私の実兄は水産学校だし父は私を手離すのをはなはだ躊躇したが、ついに十六才の

初夏上京し、上野の停車場には翁が迎へに出て居られ、上野の山下忍ぶ川のほとり寒山寺裏の者となった。

『羅漢印譜』に関しては稿を改めて述べたいが、木村竹香、山田寒山という二人の文化人の交友が『羅漢印譜』に結晶し現在に伝えられたということは幸運といえよう。

#### 4、山田寒山と会津八一

山田寒山は、新潟に明治三十四年九月七日に初遊する<sup>(6)</sup>。新潟新聞社は寒山の新潟来遊を記念し寒山の印を賞に俳句を募集した。八一はこれに応募し、最優秀でこの印を贈られた。その後、寒山は八一に逢ったが、あまりの少年で驚いたようである。これが交りの機縁となり八一が東京に出てからも交遊は続いた。『会津八一全集』(第十卷、中央公論社、昭和五十八年三月)に「明治三十五年(一九〇二)に篆刻家山田寒山を下谷に訪ふ」とある。

八一の書翰中に寒山のことが散見できる<sup>(7)</sup>。これによると八一は自用印を寒山に依頼するとともに、友人の印も依頼している。『秋艸道印譜』(宮川寅雄編者、二玄社、一九七九年十二月)に寒山刻印七顆を収めている。

八一は寒山の印をどのように評価していたのであろうか。これを知る書翰がある。大正二年九月十四日付で式場益平に宛たものである。「寒山は老勁一気呵成に数顆立地に作り天真の趣あれど、従て変化は乏しく候。勿論寒山の方遙に名人と存じ候へども、蘭八の将来は注目の値ありと存じ候のみ」

石川蘭八(一八六七〜一九三一)は、名は太郎、篆刻を初世中村蘭台に学び、蘭台歿後は河井荃廬に益を受けた。

『秋艸道印譜』に石川蘭八の印を六三顆収めており、八一が蘭八の印を極めて好んでいたことがわかる。八一は寒山の印をさわやかな刻風と愛用していた時代があるらしいが、むしろ蘭八の瀟洒な風韻を好んだようである。ここに八一の印に対する好尚が見られる。『秋艸堂印譜』所収の印から推察すると、会津八一の周囲の印人の多くは、八一の漢印を宗とする篆刻観の影響が見られる。中でも石川蘭八、山田正平・錢瘦鉄にはそれが言えそうである<sup>(8)</sup>。

宮川寅雄は「この現代における第一級の篆刻家を、道人はふかく愛し、教えて倦むところがなかった。正平の作品は時流をぬき、また書画も独自の境をつ

くった。そして一九六二年、道人におかれること六年、六四歳で病没した。道人は自らは刻することをしなかったが、篆刻は正平に托し、正平の求める学問を惜しみなく正平に与えた。このようにして、道人と篆刻について考えるとき、正平とその作品にふれずに核心に入ることには許されないと関係であった。」(『秋艸道人の用印について』『秋艸堂印譜』)と述べるが当を得ていると思われる。

#### 5、木村竹香と会津八一

木村家と会津家は、古町通五番町、古町通四番町と地理的に近く両家は極めて親密であった。山田正平は「会津先生と私」において次のように述べている。

来客も多彩だったが、殊にこの私の家と会津御一家とは極めて親密で、先生の御両親の慈顔も昨の如く目に浮かんで来るのである。

実父は若い八朔郎(会津先生の俳号)さんを非常に珍重し、会津さんはまた竹香老人と云って知己としていた。会津先生がいつぞや御機嫌よろしき時、俺の書は竹香老人が見付け親だと笑話しをされたが、そのときのお話に、先生の叔父さんに新潟市助役をやり歌も書きよくした方があつて、八一は字がマジイと小言を云つて居られた際、住所印かの書を依頼したので竹香君が八一に書を頼む位ならもはや小言は止めると言つたことがあつたそうである。

この事に関し八一自身述べている。

さう致しますうちに、或る時下宿へ帰つて見ると叔父から手紙が届いてゐる。また書道のお小言かと思つて封を開いてみますと、

これまで私は兎角お前の字を非難して来たけれども今日からはやめた。どうか今までの処は悪しからずお許しを願ひたいことが一つ起つて来た。といふのはお前も知つてゐる木村竹香といふもの一数年前に亡くなりましたが新潟の古町通五番町に木村竹香といふ判木屋があつたのであります―がこの間来て、私は判を彫るのを業としていろいろな人にお近づきを得てゐますが、氣にいつた書き手を見



つけて、自分の名刺を書いてもらつて、それでツゲの判を彫つて一生涯名刺として刷つて使ひたいと思つてをつたけれども、自分の胸にピッタリする字に未だ會つて出合つたことがない。ところがお宅の八一さんといふ人の字は、私が年来希ふところの字にピッタリしてゐる。それで、どうか一つお宅様から序いでの際に、「木村竹香」といふ四字をお書き願ひたいといふことを願つて頂けないでせうか、といふことをいつて来た。さういつては何だが、私はともかく市内では名筆であるといはれてゐるのに、私のことは何もいはずにお前のことを願つて来るので、私も、これは悪いことをした、八一に向つて今までまことに不適當な意見を加へてをつたといふことがわかつた。誠に相済まなかつた。

といふ意味の手紙を叔父からもらつたのであります。私はその手紙を見て、いろいろな感情が起つたであらうことは申すまでもありません。生れてからはじめて私は自分の字を賞められたのであります。

木村竹香が私の字のどういふ所を感服したのか、後日よく問ひ質してもみませんでしたけれども、君は日本においても、僕の字を初めて賞めてくれた人だといつて、私はよく茶のみ話にしてをりましたが、だからお前の子の正平は一生涯私が指導してやる。正平を必ず有名な男にしてやる。といふことを私は口に出して申したこともあるし、実際今でもさう思つてゐるのであります。

山田正平と申しまして山田寒山の養子になつて、今日まづ日本の篆刻界では新しい、といつても彼も相当の年輩になりましたけれども、今日も私は何かと相談を受けて彼のために致してをり、時折正平にもそのことを申すのであります。お前の親が、何人もけなしてゐる私の字をはじめて賞めたのである。お前も一つもつと偉くなれといふことを、赤ん坊に對する如くに私は常に申してをるのであります。

〔書道について〕『会津八一書論集』長島健編、二玄社、一九六七年一月

八一は木村竹香に印を依頼している。この印は『秋艸堂印譜』に収録されている。「北人」（白文方印）である。八一は伊達俊光に宛た明治三十年十二月六日の書翰の中で「予が新刻の凶書之章御高評被下度候。刻者木村竹香新渴之人、山田寒山と友としよし」（『会津八一全集』第八卷、昭和五十七年十一月）と、

この印について触れる。八一の書簡で最も早く竹香のことが表れたものである。ここで会津八一と木村竹香との關係について若干触れておきたい。会津家と山田家は非常に近く、両家は懇意にしていた。八一は終生篆刻に注目しており一冊の書物にしたいと考えていた。八一が篆刻に興味を抱いたのは、この竹香に追うところが大きいと思われる。

次に八一が竹香に贈つた俳句が「高田新聞」に掲載されている。明治四二年五月二日である。

篆友木村竹香この頃其居をうつして新居の句を需むるに応じて、

机据て新居の春も暮れにけり

春光や瑪瑙を刻む刀のさき

鉄筆を握れば遠し鳴く乙鳥

店さきや印ほる耳に飛ぶ燕

（和泉久子著『新資料付注会津八一書簡集』笠間書院、一九六八年二月）

山田家に八一の俳句が二句書き残されている。

羅漢寺やさくらの上の月一つ 八朔郎

木村竹香子に羅漢の句を問はれて

花ちりてひくれば白いなるら可ん哉 朔

八一がなぜ正平をそこまで庇護したのか、次の一文「書道について」（『会津八一書論集』）から明瞭である。いくらか八一の脚色も感じられるが、略ぼこのような経緯であろう。

### 三 竹香からの教え

それでは具体的に正平は竹香から何をどのように学んだのであろうか。

正平は『耕香館画贖』の摹写を残している。この款記に、「大正十一年元正平」とあることから、一九一二年正平十四歳のものであることが知れる。これは正平の書画として最も初期のものであり、繊細で感情の細やかさのあらわれたものである。大正三年（一九一四）正平十六歳の時、会津八一の依頼を受け

た竹印「秋草堂」と石印「獅子宮人」を刻した。更に同年、竹製の筆筒に蘇軾の「前赤壁賦」を小楷で刻している。また「中井敬所先生銅像記」の隷書がある。大正五年（一九一六）正平十八歳の時刊行した『正氣印譜』の序に見られる版木の刀技も水準の高いものであり、竹香譲りといえるものである。このように正平若年の作品に竹香の影響は多分に見える。

正平は大正三年（一九一四）十六歳の時『梅檀二葉香印譜』を成譜している。これは手控え印譜ともいふべきものである。『正氣印譜』を溯ること二年、正平が篆刻を始めた頃の印を収めたものであり、山田正平研究において貴重な資料と言える。『日本の遊印』（木耳社、昭和五八年十月）で紹介した。封面は山田寒山が題しており、刊記に「大正三年冬至三日題正平君印々」とある。印影総数六四顆収めており、正平の自用印の他、中井敬所の摹刻、顧湘の刊行した『小石山房印譜』所収の印の摹刻などが含まれている。

木村竹香の印譜に『一画千金』、『鉄筆三要』（山田家蔵）がある。これに収められた印をみるに、竹香が中井敬所や岡本椿所に篆刻を学んだため、この二家の影響が見える。更に正平においてもこれは言える。『正氣印譜』になると一つの様式化された型が見られるが、この新潟時代は正平模索の時代といえ、章法は多岐にわたる。

正平は竹香をどのようにとらえていたのだろうか。「会津先生と私」の中において述べている。

私は新潟市の篆刻の家、木村竹香の二男として生れた。実父竹香は羅漢印譜の刊行者でもあり、その風流とそして徹した真念とで七十七の一生を終始し、新潟市は勿論県下では知られて居るので、偶々私は帰郷すると致る所で実父竹香の想出話しが出て覚えす坐を正すことさへあるのである。壮年にして岡本椿処を師とし、終生その師弟の情誼も立派であったが、楣間には竹香居主人の為め書きのある敬所の篆書、一六、黙鳳、初代蘭台の木彫の額なども賑やかで、青山碧山が丹青こめて漆り上げた羅漢印龕を床側にして香花をたやさず、床の間の幅は時に応じて懸け更へるのを楽しんでた。来客も多彩だったが、殊にこの私の家と会津御一家とは極めて親密で、先生の御両親の慈顔も昨の如く目に浮かんで来るのである。

八  
安藤搦石は正平と竹香の関係を「歴訪・山田正平」（『書品』第九八号、一九五九年四月）の中で述べている。

正平と竹香の関係の核心をついた名文である。これをもって本章の結としたい。

「会津先生と私」の中に山田先生は実父木村竹香について少しく述べている。これによって寒山和尚の一代の傑作となった羅漢印十九顆は竹香の依頼で作ったものであり、竹香はこれをもととして、所謂羅漢印譜を刊行する顛末が知られる。このため寒山が竹香に与えた手簡三百二十通に及んだと言うのであるが、三百二十余通とは寧ろ竹香の苦心のあとと見るべきである。印譜中の浜村蔵六の序文（河井荃廬の筆跡）「寒山尊者、北越舟江に竹香と云う拾得を得て云々」と言う文章も体裁上の面白さをひねった訳ではない。事実竹香老人が羅漢印完成に至るまでの縁起を綴った、肉筆の一卷を見せてもらったが、蟻の頭程の細字で認められた数方の文字は、完成までの二十年の辛苦を彷彿させている。よくもまあ他人の作品の完成にこれ程の情熱が続くものだと、呆れないではいられないと云うのが今日の実際だが、寒山に対する敬慕の念の深さはさておき、翰墨風流に対する竹香自身の妄執のようなもの、これは又とんでもなく大変なものだと言わなければならない。

山田正平の芸の執念の中に竹香の妄執が籠っている、と言ったら怪談めくが、親と子との関係とは元来そう言うものなのだ。正平先生はそれを知っている。寒山について語る時は非常に雄弁な先生が、竹香については殆んど羞らいを含むかのように、多くを語ろうとしない。先生自身のこととなると、韜晦して一語も語らない。これは単なる謙遜か。確かに謙遜でもあろう。然し人はその語ろうとしない処に彼自身が有るものだ。

#### 四 おわりに

本稿では、正平の実父木村竹香に関して実証的総合的に言及した。

また、山田正平と実父木村竹香の関係、正平の新潟時代の一端を述べた。正平が篆刻に志したのは竹香の元にいた十五歳の頃である。正平若年の作品は竹



香の影響を極めて色濃く受けているが、これは当然ともいえる。

木村竹香は一級の文化人であり篆刻家であった。それは竹香の周辺を見渡せば分かる。竹香が交流した人物の多彩な顔ぶれ、そして何よりも山田寒山との合作とも言える『羅漢印譜』の刊行は特筆できる。これは竹香の寒山に対する思い入れもさることながら、自身の篆刻への執念が窺われる。山田正平はそういう竹香を尊敬していた。それは竹香没後「竹香居追福」の梅木印を刻し、友縁の人達に贈った一事からもみとれる。

幼年期の環境がその人の生涯を決定づけることは多分にあるが、正平に関してもそれが言えそうである。篆刻家木村竹香の次男として生まれあわせたこと、会津八一、山田寒山との出会い、すべて正平新潟時代の出来事であり、正平芸術の根本は新潟時代にその端緒をみることができそうである。

### 【注】

(1) 『日本篆刻家の研究―山田寒山・正平を中心として―』(熊日出版、二〇一七年三月三十一日)

(2) 中井敬所の『日本印人伝』は、わが国の印人伝における唯一の専著と言えるもので、好著である。敬所の『印人伝』に関して『日本印人研究―中井敬所の高美容研究―』(『大学書道研究』第一号、全国大学書道学会、二〇〇八年三月三十一日)で考究した。

(3) 筆者がこれまで発表した木村竹香に関する拙稿は以下の通りである。

① 「山田正平研究―正平と木村竹香―」(『日本書道新聞』第三号、第四号、日本書道新聞社、一九八六年二月二十五日、二月十日)

② 「山田正平研究(二)―山田家藏画日記翻刻―」(『修美』第一四巻 通巻五〇号、修美社、一九九五年四月十五日)

(4) 岡村浩「越後路の篆刻家・山田寒山(一)」(『阿賀野市誕生記念五頭山麓ゆかりの文人山田寒山集』、山田寒山展実行委員会、二〇〇四年九月十日)

(5) 「日本印人研究―山田正平の生涯と芸術(一)―」(『熊本大学教育学部紀要』第五二号、熊本大学教育学部、二〇〇三年十一月二十八日)で紹介した。

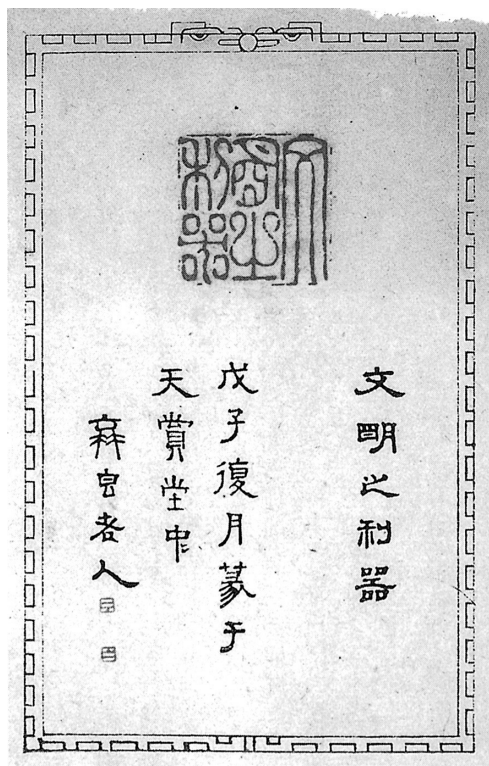
(6) 柿木原くみ「越後路の寒山・正平と会津八一」(『相模国文』第三二号、相模女子大学国文研究会、二〇〇五年三月十日)

(7) 「会津八一の印学」(『書学書道史研究』第三号、書学書道史学会、一九九三年六月三十日)

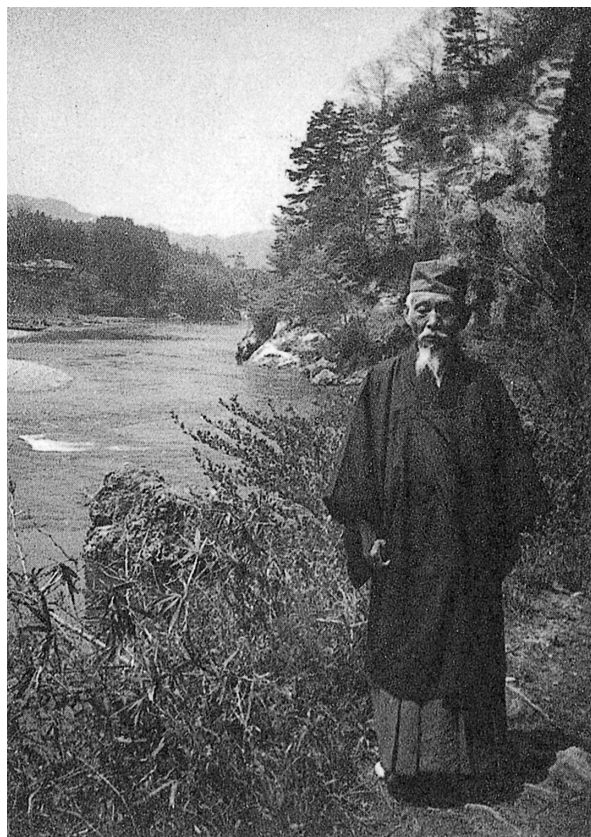
(8) 「會津八一の印学」(『修美』第十二巻 通巻第四三三号、修美社、一九九三年七月十五日)



(图2) 木村竹香写本2種



(图3) 木村竹香篆刻



(图1) 木村竹香肖像 (昭和15年5月7日)